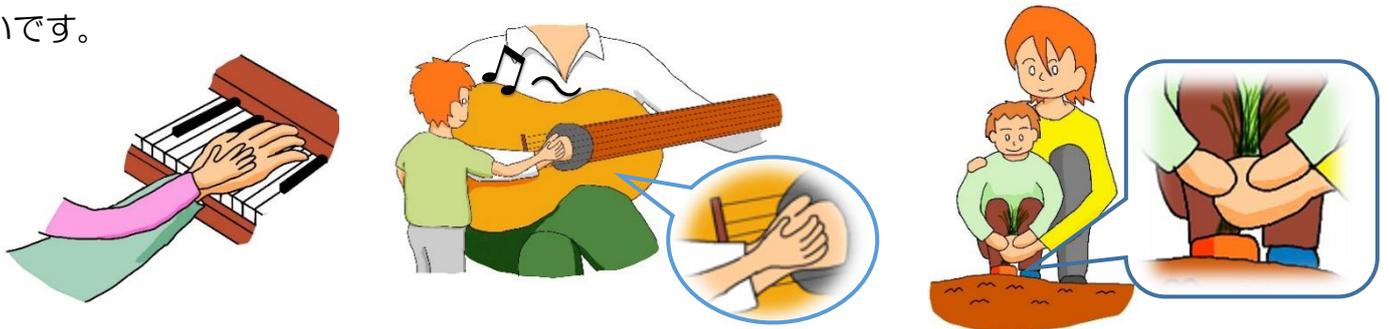




## ～子どもと一緒に触れて体験する～

乳幼児期になって自分で体を動かすようになると、子どもは身の回りのものに興味を持ってさまざまな体験を増やしていく準備ができてきます。見えにくさのある子どもの中には、新しいことに対して好奇心よりも不安を感じやすい子どももいて、「触ってごらん。」「やってみてごらん。」と声をかけても、尻込みしてしまうことがあります。触れると動いたり音が出たりするもの、またあまりなじみのない手触りや形状のものだと、不安な気持ちになりやすいでしょう。

そのようなとき、子どもが安心して体験することを促すために、大人の手の上に子どもの手を乗せて一緒にやってみます。乳幼児の場合、初めて経験することは楽しめるように丁寧に行えるとよいです。



ピアノやギターといった楽器、畑で収穫するといった活動など、大人の手の上に子どもの手を乗せて、安心して体験できるようにします。こうした体験を通して、初めての事柄イコール怖いものではなく、「触ってみたいな」「やってみたいな」という気持ちを育てていきましょう。

私たちの乳幼児教育相談に通っている子どもたちも、初めてのことだと後ずさりしてしまうことがあります。特に早く動くおもちゃに対してはその傾向が見られるようで、その場合は無理をしません。ですが、できそうであれば、いつも接している私たちの手の上にそっと手をのせてもらい、ゆっくりと活動に誘います。一度安心して経験できると、子どもたちの表情はさっきまでとは打って変わって興味津々です。特に（収穫した）野菜に触れる経験の場合は、ご家庭に持って帰って調理して食べてもらうこともありますので、食卓での家族との体験の共有になったり畑になる野菜のことを学んだりすることにもなります。楽器についても、次回相談に来た時には、自分からまたやりたいと伝えてくることもあります。もちろん、子どもとの信頼関係があってこそであり、私たちの手が新しい世界との橋渡しとなるので、日頃からの関係作りがとても重要であることは言うまでもありません。

また、こうして触る経験を増やしつつ、少しずつ日常の基本的な生活習慣の形成を図っていきます。例えば、スプーンやフォークの使用、靴や靴下の着脱、手洗いやタオルの使用、ボタンやスナップのかけ外しなど、手を使う基本的な生活習慣にまつわる動作はたくさんあります。見えにくさのある子どもは、にぎる、動かす、触る、探すなどの経験が不足しがちですので、意図的に取り入れるようにします。スプーンならご飯など落ちにくいものをすくった状態で渡し自分で口に運んだり、ボタンは一番下の1つだけ自分で外してみる、はさみは途中まで切っただけで、最後にチョコキンと切り離すところからやってみるなど、失敗しないように工夫しつつ、「できた！」という成功体験も伴うようにしてあげるとよいですね。

＜参考文献＞

五十嵐信敬 編著 「目の不自由な子の育児百科」1987 コレール社